

宋元版禅籍研究（八）

——景德伝燈録・万僧問答景德伝燈全録——

椎 名 宏 雄

一

古来、多種多様の異版を有する『景德伝燈録』三〇巻は、その禅門における立場と影響力にかんがみて、成立状況や古版類に関する研究が、基礎的な重要課題であることはいうまでもない。成立状況に関しては、道原が編集し上進（一〇〇四）した原初本と、楊億等による刊定本、さらに後の流布本、との三段階がある。また、古版類については、東禅寺本と開元寺本との関係、四部叢刊本を含む宋元版各種の検討、高麗版の位置づけ、などが当面の課題であろう。

もっとも、個々の点については、近年来、若干の研究が進められている。すなわち、刊定本については、思想的背景という視点から解明を試みた石井修道氏のすぐれた研究があり、高麗版についても西口芳男氏のユニークな論考がある。筆者もまた、古版テキストに関する二、三の考察があるが、

いずれも個別的であって、本書の成立や異版類の総合的な研究は、今後に期せられている。

このような現況にあつて、本稿は紙幅の都合により、（一）刊定本の形式的構成を伝える『大中祥符法宝録』所説の検討、（二）四部叢刊本のテキストに関する旧稿の訂正、（三）未公開の『萬僧問答景德伝燈全録』の紹介、という三点を記述したい。

二

まず、道原が本書を編集した際の最初の書名は、『仏祖同参集』という表記であつたらしい。それは、楊億の数ある文集中、遺存唯一の『武夷新集』（二〇〇七年自序）巻七に収める「仏祖同参集序」なる一文によって知られる。ただし、ここになぜ『仏祖同参集』という書名が付せられたのか、またなぜ楊億が序文を書いたのか、という二つの問題がある。

この書名については、すでに石井氏が、本序文と楊億の

「景德伝燈録序」との比較などにより、道原の原著は「仏」(教)と「祖」(禪)との「同参」(一致)を述べようとしたものではないか、と推定されている。また、道原と楊億との交流関係については、目下のところ文証はないが、まだ『仏祖同参集』が成立しなかった以前から、何らかの交渉があったと思われるふしがある。この点については、いずれくわしく検討をくわえたい。

ともあれ、楊億は『仏祖同参集』に序文を付した。文中、印刻流布に関する言辭はみられぬから、この序は刊行を前提としたものではなく、上進のための付序であったのかもしれない。本書の上進は、詔勅による入蔵を意図するものであったから、序のほかには上進書が付せられていたはずである。

こうして、上進された本書は、国家による検定を受ける。これが楊億等による刊定であった。刊定とは、文の冗長をけずり、句義を定めることをいう。「景德伝燈録序」によれば、この刊定は采擷と附益、すなわち添削をくわえたことを、楊億みずから明記している。かなり大巾な添削だったのである。

かくて、装いを新たにした『景德伝燈録』三〇巻が完成した。本文中にみえる最新の記事は大中祥符元年(一〇〇八)のものであり、各異本に共通する。したがって、刊定の完成は、このころとみてよい。そして、三年後の大中祥符四年

(一〇一一)、本書は詔により待望の入蔵をはたす。この年時は、北宋勅版蔵經への新訳經や東土撰述書の入蔵に関する詳細な記録である『大中祥符法宝録』の記載であり、もっとも確実である。

注目すべきは、『大中祥符法宝録』(一〇二五)二二巻の編纂が、趙安仁・楊億・僧惟浄等であったという事実である。つまり、卷二〇の末尾に記載される『景德伝燈録』の収録祖師数などの記事は、楊億等が刊定した同書の内容を、かれみずから記載したとみて誤りないであろう。

こんにちみられる、東禪寺版大蔵經本以下の各テキストによれば、高麗版を例外として、『景德伝燈録』全巻の収録者数は、ほぼ一七〇一名である。しかるに、『法宝録』の記載を整理すると、一七五五名にのぼる。この約五〇名の差は、主として雪峯下第七世、第一一世の部分にある。すなわち、今本のテキストでも、青原下の七世以下、特に法眼宗の人々に関する分量の豊かさという傾向が、刊定本にあつては一層いちじるしかったことを知る。

あたかも、わが齋然が熙寧六年(一〇七三)に開封の蔵經刊行処、印經院から賜った新訳入蔵書中の「景德伝燈録三十三巻」こそは、この刊定本の体裁を印刻した本書の最古版であったに相違ない。該書は、後に京都法成寺の火災により、勅版蔵經すべてとともに烏有に帰してしまった。

三

こうして、『景德伝燈録』は、福州版大蔵経本から、テキストとしての新しい段階に入る。もっとも、それまでの間に相つづ禪録の入蔵や、『祖源通録』二四卷『宗門統要』一〇卷などの重要な禪叢書の成立をみ、互いに影響をおよぼし合う。遺存テキストの少い北宋期は、禪録の流動期であった。ここでは、四部叢刊本のテキストについてのみ述べよう。

いたずらに宋版として無批判に用いる者が後を断たず、また、筆者の誤った旧稿がそのまま引用される責任上、看過できないからである。

四部本は、五種類の混合本である。これを種別に示すと、つぎの通りである。

- (一) 卷四、九、一三、三〇 紹興四年（一一三四）刊本
- (二) 卷一〇、一一 南宋前期刊本
- (三) 卷二、三 延祐三年（一三二六）刊本の謄写
- (四) 卷一八（第二、八、一一、一九紙のみ）

至正二年（一三六五）刊本

- (五) 楊億の序、西來年表、卷一 延祐三年以後の刊本
- 旧稿では、(一)を嘉祐（一〇五六～六三）頃の刊本、(二)を治平四年（一〇六七）以後の刊本、とした。その主たる理由は、(一)の刻工名が静嘉堂文庫に所蔵する『新唐書』のそれと共通

し、この宋版『新唐書』が嘉祐年間の刊本とされていたために、同時期ごろの刊本と推定したのであり、また、(二)は欠筆文字に基づく推論であった。

しかるに、その後、当該の『新唐書』が実は南宋の紹興七年ごろの刊本であることが、書誌学の専門家である尾崎康氏によって論証されたのである。氏は、四部本の『景德伝燈録』にも詳細な検討をくわえ、(一)は紹興四年（一一三四）の釈思鑒刻本、(二)は南宋前期の刊本、と結論づけられている。

たしかに、四部本の(一)の部分は、東禪寺版蔵経本に近く、収録人数だけの単純比較からも、前述の楊億刊定本とは大差がある。嘉祐という東禪寺版以前の年号には、大きな疑問が生ずるゆえんである。かくして、四部本の(一)と(二)は、尾崎氏の論証に基づき、右のごとく訂正しておく。ただ、(五)の部分を氏が宋版とするのには同調し難く、旧稿のとおり延祐三年より後の版としておく。

四

『萬僧問答景德伝燈全録』なる書については、楊守敬の『留真譜』（一九〇一年序刊）に巻五の巻首一葉が影鈔で掲載され、その原本の存在を知らしめていた。しかし、当該原本が台北の国立故宫博物院に楊氏觀海堂本として所蔵され、これを実地調査された阿部隆一氏による調査報告によって、はじ

めて本書の書誌的な内容が世に知られるにいたった。現在、駒沢大学図書館には本書の影写が蔵され、研究を容易にする。

これらによれば、故宮本は巻一・二、巻五・六の零本二冊にすぎないが、元来は『景德伝燈録』の異版なることが知られる。序跋や年記の部分を欠くため、刊時も状況も不明であるが、故宮も阿部氏も、これを元版とする。注目すべきは、各巻首の内題につづいて刻される次の三行である。

福州東禪寺慧空大師藏本／古汴景德道原大師纂集／古建香山円智居士抄刊

この三行の意味は、北宋の景德年間に道原が纂集した『景德伝燈録』の、福州東禪寺の慧空大師が所蔵していた本を底本として、福建香山の円智居士が筆写し、これを刊行したということであろう。

慧空大師とは、東禪寺版大蔵經の出版開始時における東禪寺住持、慧空大師冲真その人であり、この大蔵の完雕まで、終始にわたり前都勧首という最高責任者の地位にあった高徳である。あたかも、東禪寺大蔵の最初の開版は、元豊三年（一〇八〇）の『景德伝燈録』であった。したがって、慧空大師所蔵本とは、この元豊版にほかならぬであろう。たしかに、この故宮本は方冊で半葉二一行ながら、本文の文字一七行の形式は蔵經の体裁をもち、内容的にも元豊版に一致する。ところで、本書のテキストとしての性格は、特異なタイトル

ルの「萬僧問答」が示している。すなわち、本書の組版は、問答体、年代的記事、偈頌、などが細かく改行され、後人による拈提や著語の部分は細字に刻されている。いうまでもなく、この浩瀚な禅録を読みやすくするための、苦心の組版である。二一・五cm×一三・二cmの小型本は、さぞかし江湖の学道者たちをよろこばせたことであろう。

本書に關説する古記録は、意外に少ない。わずかに明末における常熟の蔵書家、趙用賢の『趙定宇書目』中、元板書の項目に「萬僧全録」なる記載がみられる。一方、近代の『北平圖書館善本書目』の釈家類には、巻七・一二、一七・二〇、計一〇巻の本書遺存を著録し、明刻本と明記する。

いったい、かつての北平圖書館所蔵の善本類の多くは、現在、台北の故宮博物院に所蔵されているが、当該の『全録』については、両者は別本とみられ、しかも、北平本の現存状況は不明である。かくて、北平本の出現をまたねばならず、また、本書の明代再刻を否定するものではないが、『趙定宇書目』の記載などからみて、北平本が明刻とするのに対しては、疑問を呈しておきたい。

ともあれ、この『全録』の出現により、『景德伝燈録』の元版としては従来未知の一本が加わり、合計五本を数えるにいたった。もって、その流行のほどを知るべきである。（注略）